

# 児童文学の世界

—「モモちゃんとかカネちゃん」より—

松 谷 みよ子

こんにちは、今日はモモちゃんのお話ということでお話します。モモちゃんシリーズはちいさいモモちゃん、モモちゃんとブー、モモちゃんとアカネちゃん、などがあって子供の成長過程に従って書きました。私が童話を書き始めたのは、ちょうど皆さんぐらいの十九、二十の頃でした。

童話を書いて、やはり自分がどうしても書きたいものがあるというところが大事だと思います。それから本当に有難いことですが、坪田譲治といういい先生に巡り会ったこと、その次に民話と出会ったこと、そして次に子供と出会ったこと、子供を生むことが出来たこと、私の場合はそれが大変基本的なベースになっているというふうに思います。

人形劇をやっている元の亭主、そして亡くなってしまった亭主と出会って、東京下町の太陽のない町と言われている貧しいところがあつたんですよ、床もろくに張ってないような、このくらいしか床が張ってないようなところです。そこで彼が人形劇をしたり、紙芝居をしたり、子供会をしながら歩いたのですが、その彼が言う

んですね、「ロシア民話の主人公は誰だろう」「はい、イワンです」「じゃ、イギリスの民話の主人公は誰でしょう」「きつとジャックじやないでしょうか」、「ジャックと豆の木」のジャック。「日本の民話の主人公は何でしょう」、「太郎ですよ。でも桃太郎は大変軍国主義に毒されていました。それで彼は言うわけです「本当の民衆の、太郎を探そうよ。僕たちは人形劇団を作ろうよ。太郎座という名前にしようよ」などと、出来ないうちから夢だけ大きくて、名前がちゃんと出来ました。それから私は結核で倒れて何年間も病気をしまして、ようやく結婚した時、太郎座というのがその年に生まれたのですけれども、この中で誰もが私を再起不能だと思っていたそうです。痩せかけて、胸を切り取って、赤ん坊が生まれるとも誰も思わなかったし、この人が立ち直るとも思わないくらい痩せ衰えて結婚したんですね。

それで、子供に恵まれましたけれども、その子をおぶうことが出来ない、胸の手術をしたから背中が痛いのです。でも片方のおっぱいだけは沢山出ました。それでも赤ん坊はお腹がすいて胸を叩くの

です。そこで、一生懸命抱いて飲ませながら片手で書いたのが、『龍の子太郎』という本でした。

その子が三歳、四歳、五歳くらいになりますと、こう言いました。「ママ、私の赤ちゃんの時のお話して」と言うんです。少しすると「ママが一年生の時のお話して、二年生のお話して、三年生……」。そんなことを言っていたって、頭が悪くから全然覚えていないんですね。いつが二年生で、いつが三年生だか分からなくなっちゃっているわけです。その時に、そうだこの子を普通のお母さんのように手をかけて育ててやることは出来なかつたから、この子の育っていく魂と成長していく体と、その二つを書こうと思ったのが『ちいさいモモちゃん』でした。

その時、今、日本児童文学者協会と言っていますが、その頃はただの児文協だったかしら、そこへ行つて、幼い子のお話をどう書くかという勉強をしました。それはこういうふうに入れてくれるんですね。「白いものがありました。そばへ行つてみました。それはたまたまでした。そういうふうに書けば小さな子でも分かります」と。でも、実際に赤ん坊が生まれて、抱っこして暮らしてみますと、そんなことはやつていられないんですね。大体テレビでも、算数の勉強はまだ分からないはずなのに「あのね、おやつにね、ビスケット五つもらつてね、〇〇ちゃんが来たら二枚あげてね、そうしたら〇〇ちゃんが来たから一枚しかあげなかつたら怒つてね、それでね、あれでね……」と無限に続く語り口を持っているんですね。それで「白いものがありました」なんて話さないわけ。「ビスケットがありました。五枚でした」などと話さないわけ。

ですから、子供の息遣い、語り口というものを大事にしよう。ただそれだけで書いたのですが、書いてから色々なことが見えてきたのです。

一つは、目の高さです。幼い子は本当に目の高さが低い。ちっちゃいですよ。大人は階段をコツコツと足で歩きますけど、赤ちゃんやうんと小さい子は胸で上がつて行く。次の階段がこの辺にあるわけですね。それに気が付いたのは、その頃NHKで私は台本レギュラー五本ぐらい持っていました、毎日のようにNHKに行っていたんですが、その中に『動物さんこんにちは』というのがありまして、動物のところにお姉さんやお兄さんが代わる代わる行くんですね。ある時オットセイかなにかを撮っている時に、佐藤さんというディレクターが「松谷さん、二歳児か三歳児の目の高さでカメラを回してくれる人がやつたらねえ」とおっしゃるの。確かにそのくらいカメラをグーッと下げますと、とっても面白いと思うんです。

カメラが階段を上がる時に、大人の高さで上がるんじゃないかと、次の階段が上がるように映していく、それはとっても面白い。電車に乗るのでも、私達はプラットフォームからボンと乗りますよね。でも、踏切にいて汽車が来るのを見るとやっぱり恐いですよね。そういう目の高さ。

その場合、「あっ、お花咲いてた」と小さい子が言うようになります。よく体育館なんか下の方に窓があつたりしますよね。そういうところを見て「お花咲いてる」なんて言うと、慣れないお母さんだと「何、どこに咲いているの、見えないわよ」なんて言うんですね。慣れている保育園の先生なんかだとすぐしゃがんで、「あっ、どこ。あれは赤いお花ね、あれが松葉ボタンというのよ」と話してあげる

ことが出来ると思うんです。

小さな子はただ「赤いお花きれいね」と言うかもしれない。でも、それが同じように同じ方の顔を向けて、そして赤いお花を見て、そのことをもし本にするとすれば、それが幼児のお話になるのではないか、そんなふうに思ったわけです。

それから、小さな子がどんなふうなテーマを持っているか。この間、いじめで死んだ子がいますね、本当にあのくらい大きくても辛いけど、うんと小さな小さな子でも辛いことあるんですよ。

『違う僕と取り替えて！』という本があって、それは保育園の先生のところへ小さい子がチョコチョコと来て「あのね、先生」よく話すですよ。そんなふうな言葉を書き留めた本なのですが、その中にこういうのがあるんです。

僕、毎日頭洗いたい。

でもお母さん、毛が赤くなるからダメっていうよ。

でも先生、頭毎日洗えば、頭りこうになるんだよね。

毎日洗ってもいいって、お母ちゃんにいいってよ、先生。

そういう詩のような言葉があるんですね。それは後の方に、それを書き留めた先生のコメントがついています。この子は馬鹿で馬鹿でとしょっちゅう言われている子です。馬鹿で馬鹿でと言われているうちに、その子は考えるわけです。毎日頭を洗ったら、ちっとりこうになるんじゃないかと。でも、今のうちにほとんどの家庭にお風呂があるということはその頃なくて、みんなお風呂屋さんです。

お風呂代もかかるし、シャンプー代もかかるし、「毎日なんか洗っていられますん」お母さんがそう言います。でもその子は必死に考えて「僕、毎日頭洗いたい」と言っているんですよ。

二歳の子のことを書いた『ちいさいモモちゃん』の中に、「モモちゃん怒る」というのがあります。それは二歳のモモちゃんがお母さんの帰りが遅いので怒って家出をして、お空へ行く電車に乗っちゃう話なんですね。

ミルちゃんという四歳の子がいました。その子が毎晩お母さんに『モモちゃん』を読んでもらいました。いっぱいお話が入っていますが、「これとこれ」というふうに、みんなよくリクエストするんですが、三番目に必ず「モモちゃん怒る」をリクエストするんですよ。そして「三つだけ読んだからねねよ」ということになるんだけど、その三つ目を読み終わった時に、ある時涙をツーツとこぼしたそうです。なんと言ったかというところ、「私もあの時家出をすればよかった」。四歳の子が言うんですよ。それを聞いたお母さんはグサリと胸を突かれました。なぜなら二歳の時、そのミルちゃんはお母さんとお父さんがしていた会社が倒産しそうになったんです。それでお母さんは必死でミルちゃんをあっちの家に預けたり、こっちの家に預けたり、もうそこらじゅう預けまくって、駆け回ってお金を集めたりしたんですが、会社は潰れ、お母さんは病気になるました。その時ミルちゃんは小児ノイローゼになっちゃったんです。それで四歳になった時に「ちいさいモモちゃん」を読んでもらうと、「モモちゃん怒る」をきくと読んでもらおう。そして泣いて「私もあの時家出をすればよかった」と言ったのです。

私はモモちゃんを書くまでそういうことがあるとは思わなかった。四歳の子が一つの文学に出会って、二歳の時の自分の思い出と作品の主人公を重ね合わせて追体験をし、そして泣く、そんなことがあるとは思いませんでした。でも、ちっちゃい子ってそうなんですよ。

ね。

一歳半の子が一歳の子に読み聞かせをしたことがあります。一歳半の子が入院しました。皆さんも存じてでしょうか、「いないいないばあ」という赤ちゃんの本があるんです。この中にはきつと『いないいないばあ』で育った方がいらっしやるんじゃないかと思えますが、その『いないいないばあ』を持って入院したんですね。赤ちゃんのベッドというのは周りにサークルとあって、ころげ落ちないように柵が立っています。隣のベッドもやっぱり柵が立ったベッドなんですけども、一歳の子が入ってきてお母さんがいないからエンエン泣くんですって。そうしたら一歳半の子が看護婦さんに「隣へ連れて行け」と言うんですって。うまく言えないからきつとアンアンなんて言うんでしょうね。その時にその本を持って連れて行け。それで『いないいないばあ』を持って看護婦さんが隣のベッドにハイッと入れてあげた。そうしたら一歳半の赤ちゃんが、「いないいないばあ」を見せて「いないいないばあ、いないいないばあ」と言って読み聞かせしたそうです。すると一歳の子が泣き止んでケラケラ笑ったというんですけど、これは史上最低年齢の読み聞かせだなと思うんですね。そういう思いやる心はちゃんとある。

そういうふうにして子供を見ていましたら、やがてベトナム戦争が始まりました。そのモモちゃんのモデルの子はとってもおびえましました。テレビの戦争を見ておびえたんです。「ママ、戦争はどこまで来るの」って聞くんですね。「駅まで来るの、角のお菓子屋さんまで来るの、お家まで来るの」と聞きました。私は「あの戦争は遠いベトナムで行われている戦争だから、お家へは来ないのよ」と言ったけど、胸は苦しいんですね。だって日本の基地からベトナムへ

ベトナムへと飛行機が飛び立っているわけです。日本中の貨車にベトナムへ行く軍事物資を載せてカタンコトン運んでいる。それなのに「関係ないのよ」と言うのは辛いけど、ちっちゃな子にそれを教えてもまた難しい話です。

少ししたら、ある時ニュースをやっていました。私はニュースをろくに見ないで何かしていたんですが、いきなりその子が立ち上がって、テレビを指さして叫んだんです。「おまわりさん、戦争反対って言うてるのにどうしてつかまえるんだ。自分が牢屋に入れ」。

私はびっくりして目を丸くしました。大体大変結婚願望の強い子で、電気屋さんの前に行くのと立ち止まって動かない。「あの電気釜持ってお嫁に行くの」なんて五つのくせに言うんですね。私は呆れちゃうんですけれども、そういうお人形さんとはっかり遊んでいるおとなしい子が「おまわりさん、自分が牢屋に入れ」って叫んだわけなんです。

その頃は「戦争反対、戦争反対」ってみんな学生がデモしたんですよ。そうすると警官が棍棒でバカンバカンとぶって連れて行ったんですね。それを見たその子が「戦争反対って言うてるのに、何でおまわりさん捕まえるんだ、自分が牢屋に入れ」って言ったんですね。それは本当に忘れられないことです。

それをどう書くかと思って、二冊目の『モモちゃんとブー』で「クレヨンドドーン」という作品にしました。「赤いお花を見て赤いねえ」と言っている時はいいんですが、そういう戦争の問題にまでなりますと、本当にどう書くかが問われるわけです。

ある幼稚園の五歳児がこの間の湾岸戦争のテレビを見てうちでも泣くんだそうです。先生が五歳児を集めて話合いをしたそうで

す。そうしたらとうとうまた泣きながら言ったそうです。「僕たちは喧嘩しても仲良くするよ。どうして大人が殺すの」って泣いたっていうんですね。その先生はこう言いました。「いつも語りをたっぷり聞いている子が、そういう豊かな発想が出来るんです」。語りというのは絵も付いていない、ただひたすら言葉によってイメージを湧かせていきます。その語りをたっぷり、語りは心の母乳ですという言葉がありますが、小さい時から語りをたくさん、「昔、昔あるところに……」そういう語りを聞いて育った子が、湾岸戦争のテレビを見ると、こんな丸いのがヒューンと行って、どこへ落ちて行くのかパァッと光るけれども、そこで人が死んでいる、子供も死んでいる、そこまで考えられる子というのが、語りをたくさん聞いた子です、と言っていました。

話はまた進みますけれども、二冊の本が出ました。うちも二人目の子がちょうど五歳くらいになっていました。それで彼女も二冊目を読んだわけです。するとその彼女が私に言うわけです。「ママ、この続きはいつ書くの」、私は「ええーっ」と言いました。この続きを書いて欲しいというんですね。一冊目の『ちいさいモモちゃん』のモモちゃんはお姉ちゃんのことらしい。二冊目に、最後に赤ちゃんが生まれるのは自分のことらしい。次を書けば《そこんとこ》が分かると思ったんです。《そこんとこ》って分かりますか。実は、私は離婚していました。その子が一歳半の時に別れたんです。そうしますと、その子にとって父親がいないということがいつもいつも、ちょうど交響曲のメインテーマのように、心で繰り返し鳴り響いていたと思うんですね。それで『モモちゃん』を読んでもらっ

て、『モモちゃんとプー』が出来て、その時ハタと考えたわけですよ。ママが三冊目を書けば、《そこんとこ》が分かる。しかもモモちゃんのような小さな子のための作品で、離婚の真っ只中を書くというのは大変なことですよ。書こうとも思わなかったんですね。ですから出版社も「三冊目はいつ出ますか」なんて全然言わない、催促もしません。

斎藤隆介さんという作家がいます。その方がこうおっしゃいました、「虚構を積み重ねて真実に至る、それが文学だ」。そうなりまして、モモちゃんの家はパパもママもいて、二人子供がいてネコのプーがいて、楽しいお家というのを十冊書いたって別に誰も叱らないんです。なぜなら文学は虚構ですから。

でも、『そこんとこ』を書いてくれ、《そこんとこ》を書くのは恥ずかしいのか」と言われた時に、私は「恥ずかしくなんかありません」って小さな子に言いました。そしてこれは母親としても、物書きとしても追いつめられたと思ったんですね。

それからやはり何年か経ちました。ようやく書き始めた時は、ほらをくくったというべきなのでしょうが、おいしいビスケットにおいしい紅茶を入れて食べながら一筆書くような、そんな楽しい気持ちになれたのです。それは、物書きの業じゃないかと思うんですが……。

『ふたりのロchette』という作品があります。『ふたりのロchette』は離婚してから後の話です。今江祥智さんの『優しきごっこ』、これも別れた後の作品です。それをちっちゃな子に頼まれて書いた『モモちゃん』で書く。どんなふうに書いたらいいの。

最初の方に「もっかけんかちゅう」という作品があります。大人

の喧嘩と子供の喧嘩が対比されて出て来ます。それから「靴だけが帰って来る」というのがあるんですね。

ママは毎日夜遅く、ソファに座ってパパを待っています。

ピンポン、戸を開けると、そこにパパの姿はなくて、靴だけが帰って来るんです。

しまいにネコのプーが言います。

「靴は帰って来ても、ご飯食べないし、お風呂にも入らないし、寝ちゃえば」「でも、時々靴はパパを乗つけて帰って来るわ。そういう時は大概お客さん連れて来て、『おーおー、〇〇さん来たぞ、飯あるか』って帰って来るから、すぐに寝ちゃうわけにもいかないのよ」「そうやって待ってるのはパパのため、それとも自分のため」なんて、プーは大変厳しいことを言うんですね。「僕にはジャムっていうお嫁さんいるよ」「知ってるわよ」「そこ行くとジャム寝てる時もあるよ、ご飯ない時もあるし、ある時もある。でもジャムがいればそこは僕のお家」「じゃ、今ここにいることは誰のお家よ」「こも僕の家」

ネコってずるいなって思うんですけども、そういう結婚という枠にとらわれない自由なプーの姿もママは考えるわけですね。

それから、ママのところへ死神が来るようになります。心臓の半分を掴まれたようで息が苦しくて、もうじつとしていられない、恐いんですね。とうとう森のおばあさんのところに相談に行きます。するとおばあさんは、何にも言わないうちに、「分かっているよ」。一つの植木鉢を出して来ます。二本の木が寄せ植えになっています。おばあさんは一本ずつ森の土へ埋めてやります。すると、一つの木がすくすくと育って、見る間に大きくなります。「これがおまえさ

んの木だよ、育つ木だよ」。パパの木も育つんです。青々と育つんですが、「見てごらん、パパは歩く木だよ」。肩の上に宿り木を乗せて、パパはズリッズリッと根っこを引きずって歩き出すんですね。「木が歩いた」、ママは震えます。「育つ木と歩く木と一つの鉢の中に一緒に植わっているから、苦しくなって二つとも枯れてきたんだよ」。それを聞いてマは離婚することを決めるんですね。

ここで突然ですが、「まえがみ太郎」という、「龍の子太郎」と同じ時期に書き始めながら、本になったのは大変後になった本の話をしたいと思います。

この「まえがみ太郎」は和歌山の話が元なんですけど、どうどの山というグラグラ揺れて火の粉を散らし、石を散らし、下の村は苦しみます。それでどうどの山から火の鳥が飛び立つと村は幸せになるといふ、そういう言伝えもあるんですね。それで太郎は出かけて行きます。お正月さんのくれた馬に乗って行くんですが、荒れ狂っているのは火の鳥でした。「体が動かない、飛び立つことが出来ない、苦しい」と言っています。お正月さんに教えられて、命の水を探してくれば火の鳥は飛び立てるといふので、まえがみ太郎はずっと旅をして、竜宮まで行って、山の御殿に行ったり、いろんな旅を続けて。やっと命の水をもらって来るんですね。そして火の鳥の足にジャブジャブかけてやります。「もっとかけてくれ」、すくすくと毛は生え、命が取り戻せたのに、火の鳥は飛び立てません。「いや、これでないんだよ、旅の途中でいろんな人にかけてやったから」「おれのために取り行ったんだらう」と火の鳥は荒れ狂います。「さうだ、思い出した、お正月さんが言ったよ「火の鳥には捨てなくてはならないものがある、そうすれば飛び立てる」って」「捨てなく

てはならないって何だ。「自分で考えな」と言って太郎は村へ帰ります。わが家へたどり着いた時、空がバァッと明るくなって、カウーッと行って火の鳥がバァッと飛び立って、上を旋回するんですね。「太郎よありがとう、飛び立つことが出来た。わしはどうどの山——あの木がうづまっている山——それをしっかり抱え込んで、自分が守らなきゃならないと思って、抱えて抱えて日が経つうちに、爪がどうどの山に食い込んでしまっただけになってしまった。そのどうどの山に対する自分の思いを捨てた時にこんなふうな飛び立てた。あの木々は太郎よ、おまえにやる。みんなと分けて好きなように使え」と言って、火の鳥は飛んで行きます。

この作品を短いのので書き、やがて連載し、でも何かが足りなくて悩んでいました。その時、今言った「火の鳥には捨てなくてはならないものがある」という言葉がスウィーツと浮かんで来て、そして「何とかでありました」へなのでした」という文体からへあった」へである」というふうな文体に書いて、一気に書き上げたのがこの『まえがみ太郎』でした。

実はこの《捨てる》ということがその時のテーマで、私には捨てなければならぬものがあると、実はその時心に思っていたのです。でも捨てられなくて、やがて二番目の子が生まれました。そしてその後、夫と別れるわけですけれども、三冊目、四冊目は別れてから後のモモちゃんの話になります。

その三冊目が出ますと、一番辛い一山を越えましたから、その後も書き続けて、この間全部で六冊。『アカネちゃんのなみだの海』を二年前に書き上げて、その時勘定したら三十年経っていました。随分のろい話だと思います。

こんなふうに長くかかったのは、その時あった出来事、何しろ自分の家の歴史を書いたようなものですから、面白いからすぐ書いておきましょ、はい、本にしましょ、というわけにいかないんですね。様々な出来事を雨に晒して、ちょうど布目だけになった時にやっと書けたような気がします。

気が付いたら、本当に——大河小説とか大河ドラマと言いますね——いつの間にか大河童話になったのかなあ、なんて自分で思いました。五冊目には『アカネちゃんとお客さんのパパ』という題がついています。

そして六冊目、私としてはとても書きづらかったです、パパが死ぬことが分かっていたから。なかなか書きませんが、今まではそんなに出版社も言わなかったのですが、「どうしても六冊目を書いて終わりにしましょ」と言われて、ようやく書いたのがこの『アカネちゃんのなみだの海』でした。

この『なみだの海』という作品は、地球が火傷する話です。原子爆弾の恐ろしい大きな大きな実験があるというので、みんな青くなります。ママが出かけて行く時に「地震になったら何とかしてね、津波が来たらこうしてね」と、モモちゃんは心配するんですが、アカネちゃんはワンワン泣き出します。「私まだ死にたくないよ、アイスクャンデーまだちっとしか食べてないよお」ワンワンと泣くんですね。それでモモちゃんが大変怒りまして、「水道屋さん連れてきて、目のところへ栓してもらおうか。そんなに泣くとクジラの子が来るよ」と言うんですけど、「だって涙が出て来ちゃうよお、お姉ちゃんはもうたくさん大きくなったからいいけど、私まだだよ

お」なんてワァワァ泣く。お姉ちゃんはしょうがなくなつて「涙屋さんに連れて行こうか、それとも水道屋さんにしようか」って言いながら出て行きます。アカネちゃんは一人でワンワン泣いていますと、気が付くとそのあたりが海になつていて、クジラが泳いで来ると、クジラが「ああ、いい気持ち、涙の海が大好き」って言うんですね。「地球さんが火傷して困ってるんだよ、この涙の海に浸してあげるとなおるんだよ、呼んでいいかい」。ヒューッって呼ぶと地球さんがザブーンって飛び込むんです。そういうことは童話だから出来るんですが。そして浮いたり沈んだりしながら「アカネちゃんありがとうよ、心配して泣いてくれたから、その涙が私の火傷をなおすよ」と言うと、アカネちゃんは困っちゃうんですね。「私はアイスキャンデーが食べれなくなつてちよつと泣いたんだけど……」なんて思うんですが、フツと気が付くとモモちゃんが揺すぶつていて、「ほら、アイスキャンデー買って来たよ、食べよう、何本目のアイスキャンデーだね。いつまで生きていけるかなつて、そういう余韻を残して終わるお話ですが、古田足日さんが「これは神話の世界だ」って誉めてくれたんで、突然よくなつてうれしくなつたんですが。

そういう戦争の話を散りばめながら、アカネちゃんのパパはやがて死ぬんですけども、なぜこの本を書くのが辛かつたかというところ、小説「捨てて行く話」というのが、『ちくま』に二年半ぐらい載つたんです。それがもう一つのモモちゃん、大人のモモちゃんというか、モモちゃんの世界の大人版なんですね。最後の方はその本と同じ話を一緒に書かなくてはならなくて、とってもそれが辛くて。この同じ時期を、ひとつは童話で、ひとつは小説で書くのは、ある時

はとても面白く、ある時はとても辛いことでした。

これが三十年ということで、いってみればインタビュールなんかもあるかもしれないから、すぐに本にしてくださいという筑摩書房のこの『捨てて行く話』を、「一年待つて」と待つてもらいました。今になれば同じことですが、当時モモちゃんが三十年で完結というので、随分インタビュールもありました。その時に大人版と読み比べられるのが辛かつたんですね。

さっき、「サインしてください」ってポロポロの『ちいさいモモちゃん』を持って来てくださいました、本当にうれしいと思います。「昔読んだモモちゃんが一番新しいのが本屋さんにあつたから買いました」とか、「お嫁に行く時に娘に持たせてやります」とか、この間は「今、陣痛が来ました、これからお産をしに行くのでお守りに持つて行きます」とか、いろんな形で今も愛してもらっているモモちゃんをこんな思いで書いたので。児童文学ではありませんけれども、大人の文学でもあると思います。小さな子のお話ではありませんけれども、でも中に書くことは決して子供だましではないと思つています。

(平成六年十二月七日、第二十九回文芸学会講演より)

文責 紙 宏行